



日本経済新聞社 産業部 小松 潔さん 平成5年3月より2年間経団連記者クラブ/重工業研究会に所属 ベテラン記者として、時に辛口記事の、鉄を愛する記者である この3月より機械クラブに所属

・新聞記者の夢・ロマン・ 鉄の躍動をペン先に

◆「鉄は国家なり」の時代から見ると“地位低下”のイメージを抱いていたのだが、担当してみて鉄鋼業界の重みは依然として大きい、「産業の米」として人類の創造的活動に占める存在の大きさを実感しました。

◆R&Dの余地も少ないのでは、と思っていましたが、依然として開発案件が一杯ある。川の流れのように一見表面的には変化はないが、実はその中では新しい発見・進歩が一杯あって、奥が深い、噛めば噛むほど味が出る。ほめ過ぎたな、これは（笑）。

坂上 鉄は人類にとって実に身近な存在です。鉄のルーツに思いを馳せると、例えば日本の鉄の歴史はたたらが主です。1トンの玉鋼を造るには、確か12トンの砂鉄と同量の木炭が必要といわれている。鉄は森から造られてきたとも言えますね。この自然や文化への“近さ”，そこに素材性を強く感じます。よりプリミティブに、自然を生かすかたちで鉄を使っていきたいと思っています。

鉄の世界、特に建築の世界で最近強く感じるのは、使う側と造る側の距離が遠い、ということ。建築家（設計者）がいてゼネコンがいてアプリケーターがいて鉄鋼メーカーがいて、それも営業の方が主たる窓口でその先に製造があり研究・開発部門がある。例えば、ほとんどの建築家がカタログより選んでいるのが現状でしょう。素材の機械的性質だけではなく、文化性、自然との近さといった面での特性がどの程度理解されているのかな、と。建築の世界は実に広い文化を持った世界ですが、建物を造る側に鉄の良さを本当に分かっていない、あるいは分からせてないケースが一杯あると思う。使う側にとっては特に素材を選ばない時代なのかもしれませんね。

鈴木 現代の建築では木造、鉄骨、鉄筋コンクリート造が代表的ですが、将来の超々高層ビルの可能性を考えると鉄のイメージがふくらんできますね。仕事柄、例えば鉄製の素敵な門扉があると聞くと見に行ったりしますね。仙台の近代文

◆鉄は生活の隅々まで溶け込んでいて、その存在を特に意識しない。だから、改めて鉄がすきかどうかなんて考えたことはないんだけど、子供の頃その逞しさが好きだった鉄人28号や軍艦は実は鉄だった、のですよ。

◆人類の発展は鉄とともにあります。日本も戦後は、傾斜産業政策としてまず“平和のための鉄（素材）づくり”から始め今日の繁栄を築いてきました。その過程で合併、技術指導などを通じて多くの国々の産業発展や国家建設の礎となり、同時に各国からの日本への理解を深めてきたわけです。人類・国家・民族の交流に貢献してきたわけで、そのベースは鉄が人類にとって万国共通素材である、ということです。日本はこれからも世界の掛橋として、特に環太平洋の掛橋として重要な役割を果たして行ってほしいですね。

◆製鉄所のチームワークの良さ、雇用を大事にしていること、鉄の暖かさを感じます。大地に根をおろした産業とでもいえるかな。ただ製鉄所は男の世界のイメージだけれど、男性、女性が一緒に構わないわけで、そういう世界にしてほしい。それによってより鉄の良さ、暖かさ、優しさを増やして行ってほしい。将来、鉄の世界で女性社長が生まれれば楽しいじゃないですか。

◆今の日本は土地本位性ですが、もっと鉄を生かしてほしい。インフラ整備もあるだろうし、環境問題もある。もっともっと社会を良くしていくために鉄を使うべきですよ。そのためにも鉄鋼業界の皆さんは、新技術、新製品、新用途の開発、開拓に力を注いで、そして最先端の鉄鋼業の未来像を具体的に描いて行ってほしいですね。私も新聞記者として、そういう“鉄の躍動”を行間に伝えていきたいと思っています。

・・芸術家、 一緒に現代鉄器（材

鈴木ひろ子さん

（株）ネオタイト建築計画の若手建築士 平成10年度に開館予定の仙台市「近代文学館」の設計コンペでは、同社案が最優秀案に選ばれた小学生の頃から「建築家になりたい」とはっきり夢を持っていて、その夢を実現した今、様々なジャンルの建築を手掛けている “住宅”が一番好きな鈴木さんの鉄への印象と期待



学館にも鉄はたくさん使っていますよ。コネクト方法が違うなど木材とは違うところが結構多いので、鉄の現場は大工さんの世界とは違ったおもしろさを発見できます。まず第一に重いですから、強度計算から違います。

日本での鉄の使い方ですが、まだ、“素材”でしかないよ